

平成 22 年
10 月 27 日

病害虫発生予報 11 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目 次 >

・ 今月の予報

【注意すべき病害虫】

促成ピーマン：アザミウマ類 1

レタス：菌核病 1

【その他の病害虫】 2

イチゴ・秋冬ハクサイ・レタス・秋冬ネギ・共通害虫

・ 病害虫ミニ情報

平成 22 年の水稻における主な病害虫の発生経過について 3

・ 今月の気象予報 5

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

10月下旬現在、寄生花率は平年よりやや高く、発生地点率は平年並～やや高い。
気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

アザミウマ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。また、各種ウイルス病を媒介するので注意する。
薬剤は、薬液が葉裏や花にもかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発生を抑えるために、同一系統の薬剤は連用しない。

レタス

1. 菌核病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

10月下旬現在、発病株率、発生地点率ともに平年よりやや高い。
気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多く、日照時間は平年並か少ないと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

菌核病の発生を認めた場合は、菌核が形成される前に発病株を圃場外に持ち出し、適切に処分する。
多発すると防除が困難となるので初期防除を徹底する。また、降雨が続く場合には適宜防除を実施する。
薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にも届くよう丁寧に行い、薬剤を散布する際は収穫前日数、使用回数に十分注意する。また、周辺作物等へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意して散布する。
排水不良等は発生を助長するので、排水対策等を行う。

(平成22年10月19日発表の病害虫情報 13参照)

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	炭疽病	発生量：多い	10月下旬現在，平年より多い発生である。発病株は早期に抜き取り，適正に処分する。
	うどんこ病	発生量：やや少ない	10月下旬現在，平年より少ない発生である。ビニール被覆後は発生が増加するので注意する。
	ハダニ類	発生量：平年並 ～ やや多い	10月下旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。
秋冬ハクサイ	白斑病	発生量：平年並 ～ やや多い	10月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	軟腐病	発生量：やや少ない	10月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
レタス	腐敗病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	斑点細菌病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
秋冬ネギ	べと病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	さび病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量： -	10月下旬現在，フェロモントラップへの誘殺数は平年より多い。
	ハスモンヨトウ	発生量： -	10月下旬現在，フェロモントラップへの誘殺数は平年よりやや多い～多い。

平成 22 年の水稲における主な病害虫の発生経過について

本年の水稲における主な病害虫の発生状況ならびに発生経過について、県内の定点 64 圃場等の調査結果をもとに下記のとおりまとめました。今後の防除対策の参考にしてください。

1．いもち病

[発生生態]

例年 6 月下旬から葉いもちが発生し始め、梅雨明け直前頃に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃の天候不順により、穂いもちが発生する。

[本年の発生経過]

初発時期は 6 月下旬と平年並であった。6 月下旬から 7 月上旬の降雨により、県内の広い範囲で葉いもちの感染に好適な条件が出現したが、梅雨明けが平年より早く、さらに 7 月中旬以降、気温が平年より高く、日照時間が平年より多く推移したことから、7 月下旬の葉いもちの発生量は平年より少なかった。出穂期にあたる 7 月下旬にまとまった降雨はあったものの、8 月が高温少雨で推移したことから、穂いもちの発生量は平年よりやや少なかった。

2．縞葉枯病

[発生生態]

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。発病株のヒコバエ（収穫後の再生稲）を吸汁したヒメトビウンカが越冬して、翌年の伝染源となる。

[本年の発生経過]

県西地域の一部で、縞葉枯病による茎の枯死や穂の出すくみが確認された。発生量は少なかったが、今後の動向には注意が必要である。発生地域では、収穫後は早期に耕起してヒコバエをすき込み、ヒメトビウンカの越冬場所である畦畔雑草などを除草する。

3．斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシなど）

[発生生態]

イネの出穂前には水田周辺のイネ科雑草に生息し、イネの出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。ふ化した幼虫も同様に穂を加害し、加害は収穫期まで続く。

[本年の発生経過]

出穂前の水田周辺のイネ科雑草における斑点米カメムシ類の発生量は平年並であった。本年は、6 月中旬以降高温で推移したため、本県の主要種であるクモヘリカメムシの産卵開始時期は平年より早く、水田における幼虫の発生時期は平年よりやや早かった。夏期の高温により、斑点米カメムシ類による加害期間が長期化したために、水田における全体的な発生量は平年よりやや多かった（図 1）。

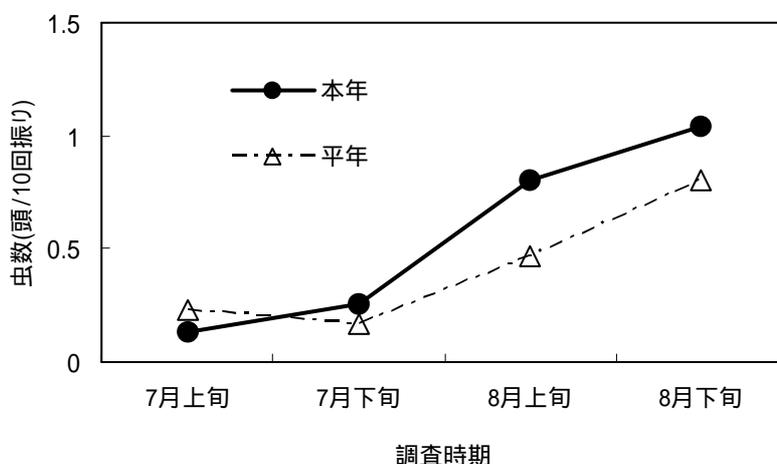


図 1 水田における斑点米カメムシ類のすくい取り虫数の推移（平年：平成 13～21 年までの 9 年間の平均値を示す）

4．イネミズゾウムシ

[発生生態]

成虫が山林などで越冬し、田植え直後から水田に侵入する。

[本年の発生状況]

成虫の活動開始時期は、4月が低温で推移したため平年より遅かったが、5月は気温が平年より高い日が多かったため、水田における発生最盛時期は、ほぼ平年並になった。成虫数は平年よりやや少なく、被害度は平年よりやや低かった。

5．イネドロオイムシ

[発生生態]

成虫が雑草地などで越冬し、田植え後のイネに産卵する。成虫も食害するが、特に幼虫の食害が大きい。

[本年の発生状況]

昨年の多発生により越冬成虫数が多かったため、平年より広い範囲で発生し、被害程度が高い水田も確認された。発生時期は平年並、幼虫数は平年より多く、被害度は平年より高かった。

6．ニカメイガ

[発生生態]

幼虫が茎内に侵入し食害することで、第一世代幼虫による被害は心枯れ茎、第二世代幼虫による被害は白穂となって現れる。

[本年の発生状況]

第一世代幼虫による被害株率の高い圃場が一部認められた。第一世代及び第二世代幼虫による被害は、ともに平年より多かった。

7．コブノメイガ

[発生生態]

国内では越冬できないとされており、海外からの飛来により侵入する害虫である。幼虫がイネの葉をたてにつづり合わせ、食害する。

[本年の発生状況]

被害程度は低いものの、県内の広い範囲で発生が認められた。また、一部の飼料用稲において、多発圃場が認められた。

・今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 10月23日から11月22日)

気象庁(10月22日 発表)

< 向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率(%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	30	50
降水量	関東甲信全域	30	30	40
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は, 数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

< 1週目の予報 > 10月23日(土曜日)から10月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

< 2週目の予報 > 10月30日(土曜日)から11月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

< 3週目から4週目の予報 > 11月6日(土曜日)から11月19日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。